論説

旗田巍と「戦後朝鮮史学」の可能性

朴（パク） 俊（チュ） 炯（ニョン）（辻 大和 訳）

一 はじめに：一九五一年、植民地朝鮮との再会

韓半島で戦争が絶頂であった一九五一年、日本の歴史学者旗田巍（はただたかし）は『朝鮮史』という韓国史の概説書を世に出した。旗田は一九〇八年一一月に韓国慶尚南道馬山（マサン）で生まれた在朝日本人二世であった。それから二年後に日本の植民地に転落した朝鮮の地で成長した彼は、釜山で中学校を卒業した後は、植民地母国である日本で学業を積み、研究活動を続けた。さらに一九四〇年からは中国に渡り、南満洲鉄道株式会社等で多様な経歴を積んだ。[1] 敗戦後三年も経て日本に帰った彼に韓半島の戦争はそれに絡んだ長い過去を浮かびあがらせたのであろう。そしてそのような覚醒の結果として『朝鮮史』もまた誕生したものと考えられる。言い換えれば、『朝鮮史』は旗田が植民地朝鮮と再会する一つの方式であった。

ところで彼はまるでその再会を困難にさせるように日本列島と韓半島の間に深い断絶の谷を設定しようとした。なぜなら「朝鮮史は外国の歴史」というテーゼによってこそ、従来の植民地支配を正当化していた論理、例えば

「日鮮同祖論」のような虚構の論理の解体が可能になるからであった。[2] しかし朝鮮史をさして単純な外国史ではなく「関係が深い外国史」とし、[3] さらに「いま苦難の鉄火にまきこまれている朝鮮人の苦悩を自己の苦悩とすることが朝鮮史研究の起点」であると述べたとき、[4] 彼が掘っていた谷は再び克服せねばならない対象になってしまった。

そうすると彼はどのような方法を通じて深い谷を埋めようとしたのであろうか。そしてその谷を埋めれば埋めるほど深くなる彼の内的な谷、もう一度いえば自身もまた一人の生産主体として戦前の学問体系に加担もしていたという事実をどのように解明しようとしたのであろうか。本稿ではこのような問いを糸口にし、旗田巍の戦後朝鮮史学を再照明しようとする。そのとき次のようなアプローチをとる。

第一に、旗田の戦後朝鮮史学を戦後日本という文脈のなかで把握する。唯一の旗田研究書である高吉嬉（コギリ）の『旗田巍』は戦前―戦後という通時的アプローチの典型を示す。[5] この本では旗田の生涯を次の四時期、すなわち①原体験期（一九〇八～一九四八）、②戦前朝鮮史学批判期（一九四八～一九六五）、③日本人の朝鮮観批判期（一九六五～一九七二）、④在朝日本人二世としての葛藤期（一九七二～一九九四）に区分した。[6] ①は旗田が日本の大陸侵略は学問的に裏付けされたものであるために、将来「清算すべき鑑定書」を負うことになった時期であり、②、③、④はその借金を清算していく過程であるといえる。原罪の形成（①）と贖罪の努力（②、③、④）という、このような自己求道的なストーリー構成は、戦前歴史学に対する批判とともに自省を繰り返してきた旗田の議論を理解するのに大きな助けとなる。

しかし旗田の「罪」成立をめぐって旗田と著者の間に立場の違いが発生した場合、著者は該当事案に対する旗田の罪意識不在をそのまま限界として規定するのみで、その理由については問いを続けなかった。[7] さらに「戦後

朝鮮史学」の再構成の経緯をただ旗田という個人の経験とアイデンティティ問題に還元することで、本来「戦後朝鮮史学」を構成する内的論理とそれが同時代に立っていた位置については関心を寄せなかった。旗田に対する評価は現在の基準に依拠する断罪に留まってはならないのであり、良心的な一個人であるからではなく「良心不足」[8]の戦後空間でなされるのが適当である。

第二に、旗田の「戦後朝鮮史学」を評価する現在の文脈も考慮する。それと関連して最近「満鮮史」に対する関心の増加とともに、早くからそれを鋭く批判していた旗田について日本の学界による再評価の試みがあり、注目される。

まず朝鮮王朝の第一〇代国王光海君（在位一六〇八～一六二三）の対外政策を分析する過程から満鮮史の再検討を試みた瀧澤規起の研究を挙げることができる。瀧澤は旗田の満鮮史批判が満鮮史に対する具体的な考察を蔑ろにしたまま、それが朝鮮史に与えた影響だけを論じているのにも関わらず、満鮮史を他律史観の一種として規定した旗田の議論が以後にもそのまま受け継がれてきたと指摘した[9]。そして彼は一九二七年八月に行われた稲葉の講演を中心に満鮮史に対するより「実証的」な分析を試み、結論的には「稲葉が満鮮史で強調したのは朝鮮社会の他律性よりは停滞性であり、大陸から朝鮮への波動だったというよりは、朝鮮から大陸への「進出」であった」と主張した[10]。

事実、上の議論は韓明基（ハンミョンギ）の光海君研究に対する反論的性格を持つ。簡単にいえば、稲葉と同様に光海君の対外政策を肯定しながらも、稲葉の満鮮史は批判の対象としてみなす韓明基に対し、瀧澤は光海君に対する肯定的評価が満鮮史の歴史認識と密接な関係があることを明らかにしたことで、「光海君＝肯定／満鮮史＝否定」の等式を成立させられないことを立証したものとみられる。このようなアプローチ方法は瀧澤が今後の課題と言及してい

るように、朝鮮人の民族主義歴史学と日本人の植民主義歴史学の間の共有地点を発見したことで、既存の対立的認識をこえて、両者間の関係を新たに把握しようとする試みにつながることができるという意味で、意義深い。しかし瀧澤の発見はおおよそ旗田の議論のなかですでに言及された内容であった。さらに稲葉の満鮮史を「帝国主義日本の大陸侵略と軌を一にし、「日本国民」のためにという名目の下で主唱された朝鮮史である[11]と定義するに及べば、満鮮史に対する旗田との見解の違いはほとんど消えることになる。

櫻澤亞伊は、当初から満鮮史の実態究明を目的に満鮮史の産室の役割を果たした満鮮歴史地理調査部の研究成果を分析した。それによると、調査部が東京支社内に設置されていた時期（一九〇八年一月～一九一三年一二月）の成果物は満鮮史ではなく、満洲史と朝鮮史を対象としており、一九一四年に東京帝国大学に事業が移管された後でも満鮮史とは異なる分野、すなわち満鮮関係史、満洲史、朝鮮史、蒙古史、中国思想史などに主題が渡っていたという[12]。櫻澤はこのような事実を根拠に満鮮史は一つの歴史体系であったというよりは、主張に過ぎなかったとした。そして満鮮史に対する「誤解」が生じた原因を瀧澤と同様に、旗田に求めた。韓国史の自主的発展を強調しようとする目的から稲葉の主張だけを根拠に満鮮史を一つの歴史体系として作ってしまったというのである[13]。しかしこのような視覚に対する批判は、旗田の論文題目が「『満鮮史』の虚像[14]」であったという点を想起するだけで充分であろう。

一方で満鮮史研究の「現段階の到達点[15]」であると評価される井上直樹の『帝国日本と「満鮮史」』を見てみよう。この本でも研究史の整理過程で旗田を挙げているが、井上は満洲国の研究者である田中隆一の言葉をかりて次のように批判した。すなわち旗田の満鮮史史観によって、戦後韓国近代史が一国史的な色彩を強く帯びるようになったというのである。さらにこれに付言していうことでは、従来の満鮮史研究批判が民族や国家を自明なも

のとみなしてきた事実には当惑を隠せないというのである。[16]

もしこのような井上の主張を脱近代的議論のなかに位置づけられるなら、旗田の「戦後朝鮮史学」は以上で見てきたような実証主義的接近と、脱近代的議論の間で解体されているといえるであろう。ところで興味深い事実は満鮮史の実態を認めるか否かと関係なく、旗田の批判を媒介として満鮮史と関連した論議の蓄積があり、さらに進んで新しい方法論として「満鮮史的視点」まで提案されているという点である。[17] ここでは従来のように民族主義歴史学と植民主義歴史学の構図だけでは説明しにくい、他の課題が含まれている。実証主義とポストモダニズムの共謀といえる、新傾向の登場と、またそれが招来しうる結果に対する分析が求められているのである。そしてこのような問題意識上に、旗田の問題提起が果たして正当な評価を受けているのか、さらなる検討が必要なのである。

以下では『朝鮮史』が刊行された一九五一年に遡っていく。まず第二章では、戦後朝鮮史学の方向性を提示した『朝鮮史』の序文を分析した上に、それから提起される問題提起が、どのように戦後日本という文脈のなかに位置づけられるかを、「民族」というキーワードを中心に検討する。続いて第三章では旗田の自己反省過程でもあった、アカデミズム批判の内容および展開を分析する。このようにして戦後朝鮮史学がもつ現在的意義と新たな可能性を探究してみる。

二　「戦後」の空間と朝鮮史学の再構成：批判から反省まで

旗田巍の戦後朝鮮史学は戦前の朝鮮史学を批判した『朝鮮史』刊行と同時にはじまったといっても過言ではな

い。岩波書店の依頼ではじまった『朝鮮史』執筆は、一〇坪にもならない東京都立大学歴史研究室の片隅で行われた。[18] 旗田は『朝鮮史』執筆と関連して「かなり大胆に仮説をまじえて、かねて考えていたことを書いた」と言及するのみだが、[19] 末松保和は「極めて平凡な章節の中に、非凡な記述を進めている」と評しており、[20] 千寛宇（チョングァヌ）は「この力作は国史学の貴重な収穫の一つ」であると同時に「国内国史学界の警鐘にならざるを得ない」と述べた。[21] この本は以後在日朝鮮人をはじめとする多数の学生を旗田の授業に引き寄せた。その中の一人である李進熙（リジニ）は『朝鮮史』の序文を読んで戦慄までおぼえたと回顧している。[22] それだけでなく、一九六九年には『朝鮮史』の英文版が刊行され、一九六一年から六六年まで駐日米大使を務めたエドウィン・ライシャワーは『東洋文化史』(East Asia)執筆のとき韓国史の部分はそれに多く依存したと告白している。[23]

『朝鮮史』刊行からおおよそ二〇年が経過した一九六九年に旗田は『日本人の朝鮮観』という本を刊行した。[24] 一九六〇年代に入って彼は日韓会談に反対する活動にも積極的に参加した。その過程で過去の植民地支配に対する責任意識が日本人には欠如していることを痛感し、そのような無責任さを基底とする日本人の朝鮮観を研究しはじめた。[25] この本に収録された文はだいたいそれに関連した論文と評論である。この時期に旗田はすでに戦後朝鮮史学の開拓者という不動の地位に上がっていた。しかし意外にも本の出版を前にしてある座談会で発言した内容が問題視され、それによって旗田は自身の過去の活動をすべて反省の目録上に上げねばならなくなった。

戦前の朝鮮史学批判からはじまった旗田の戦後朝鮮史学は痛烈な自己反省の視点から一段落したと考えられる。以下ではこの期間に生産された旗田の論著を主に対象とする。そして前述したように戦後旗田朝鮮史学の出発点といえる『朝鮮史』から検討をはじめる。

『朝鮮史』は戦後最初の韓国史通史であった。全八章で構成された章のうち前近代五章は原始時代、三国時代、

統一新羅、高麗、朝鮮のように主に王朝を章区分の基準としているのに対し、近現代三章は開港、併合、解放という変曲点的事件をそれに代えていた。時代が降りるにつれて詳細に叙述する方式を取ったため、文献解題と年表などを除いた本文全二五二ページのうち近現代がほぼ半分に近い分量を占める。本文の内容をみると、千寛宇がすでに指摘したように戦前の研究に依存して叙述した部分も少なくなく、箕子朝鮮を韓半島最初の国家とみなしたり、任那が日本の支配下にあるとしたり、甚だしくは外国の支配が韓国史の構造を規定する最大の動力であったとする部分では、いわゆる「植民史観」の影響を確認することができる。[26] それにも関わらず、『朝鮮史』が以後、朝鮮史学に莫大な影響を及ぼすことができたのは、他でもなく戦後朝鮮史学の新たな方向性を提示した序文のためであった。多少長い内容であるが、それを引用すると次の通りである。

① 日本における東洋史学の開拓者たちは、その第一歩を朝鮮史の研究に向けた。また初期における日本古代史の研究者、法制史家、言語学者なども、自己の研究分野の重要な一部として朝鮮史に注目した。史学雑誌の古い部分を取り出して見ると、那珂通世、坪井久馬三、吉田東伍、白鳥庫吉、宮崎道三郎、中田薫、金沢庄三郎などの諸氏が、朝鮮古代史について活発に研究を発表し、はげしい論戦を展開している。日本の大陸政策の進展が、その第一歩を朝鮮に向けたのに応じて、日本学界の関心も朝鮮に強く注がれたのである。（中略）

② 国家的背景をもつ朝鮮史の研究が進んだ中で、何より注意すべきことは、朝鮮人の手による朝鮮史の研究が殆んど成長しなかったことである。日本の統治政策は朝鮮人の朝鮮史家を生み出す方向を取らなかった。朝鮮という言葉が朝鮮人にとって不愉快極まる感じを与えた時には、朝鮮史を研究する意欲も起きな

かったと思う。同時に、このことは若い日本人に対しても朝鮮史研究への熱意を失わさせた。

③　しかも朝鮮史研究を阻害した原因は現実の政治の面だけにあったのではなく、学問の内容それ自身の中にもあった。日本人の朝鮮史研究の主力は古代史に注がれ、近代史には乏しかったうえに、その古代史研究は文献批判・クロノロジー・地名考証を特色とするものであった。それは古いドグマを打破する武器であり、かつては大きな進歩的役割をもっていたものであるが、新しい悩みの時代には、余りにも非人間的な学問であった。どのような社会に、どのような人間が生き、何を喜び何を悩んでいたかということを無視して、ひたすら一つの事件の起こった位置と年代とを正確に記述するものであった。それは歴史学の一つの重要な前提ではあっても、それだけでは多様な人間の歴史は尽され得ない。人間のない歴史学がつくられたのである。このことが朝鮮史に対する若い世代の関心を削減した。そして日本の敗退によって朝鮮に対する支配が消滅し、朝鮮史研究者は国家の力を得られなくなった。そのためにこれまでの朝鮮研究は一気に沈滞してしまった。

④　いまや朝鮮史の研究は新たな再出発の時期に臨んでいる。従来の成果を汲み取ると同時に、それを乗りこえ、新しい朝鮮史を開拓せねばならない。何よりも朝鮮の人間が歩んで来た朝鮮人の歴史を研究せねばならない。いま苦難の鉄火にまきこまれている朝鮮人の苦悩を自己の苦悩とすることが、朝鮮史研究の起点であると思う。それによってのみ、朝鮮史の研究が世界史の研究につながり、同時に現代に生きる人間につながると思う。このような反省の上に立って、私は朝鮮史を書くことにつとめた。その目的が充分達せられたとはいえないが、一歩でも朝鮮史の進歩に役立ちたいと願っている[27]（段分け、数字、傍線は引用者）。

序文は以上のように大きく四つの部分で構成されている。まず①では日本東洋学のはじまりに朝鮮史研究が位置していたことを暴露し、またそれが帝国日本の対外的膨張と結びついて成長していったことを指摘する。②と③ではそれにもかかわらず朝鮮史研究が漸次衰退することになった原因を明らかにしているが、第一の理由は①で指摘した学問と権力の間の癒着関係に求められた。権力を背景にした学問は国家機関の外で研究者を育てることに、特に朝鮮人研究者の育成に失敗し、朝鮮人に歓迎されない朝鮮史は結局何の研究意欲も呼び起こせなかったというのである。第二の理由は学問の内的な問題である。朝鮮史研究は古代史を中心に文献の中の時間及び場所の考証にだけ力を注いだために、人間不在の学問に成長し、それがすなわち朝鮮史に対する若い研究者の興味を失わせてしまったと主張した。結論として④では戦後朝鮮史学は人間中心の、そして朝鮮人中心の研究にならなければならないと力説しているが、そのとき「朝鮮人」とは数多くの外難を通じて外敵に対する敵対心を強く育て、近代以後より露骨になった外敵の侵入のなかでもそれに屈しない伝統を多様な形態に発現させた「民族」的存在として成長した[28]。

このように上の序文は戦前朝鮮史学との断絶を表明する一つの宣言文であった。しかしそれは戦前のほかの知的資源を継承した結果でもあった。この地点で媒介者としての役割を果たしていたのが歴史学研究会である。

歴史学研究会は一九三二年に「歴史の大衆化」と「歴史の科学的研究」を目標に創立された。翌年「滝川事件」を契機に学生と政府間の対立が激化するなか、若い歴史研究者は歴史学研究会の再確立に活路を見出し、そのための土台として研究会の機関誌である『歴史学研究』を創刊した。以後既存の歴史学に懐疑を抱いた者が研究会に集まり[29]、旗田も研究会で忌憚のない議論を展開することができた[30]。前述したように一九四八年に帰国した彼は

すでに長い期間日本の学会と離れていたため、新聞雑誌から学術論文まで目のつく限り耽読していたが、[31]特に『歴史学研究』は研究会を直接訪問し、既刊の分はすべて確保する熱意まで見せた。[32]さらに一九五九年に旗田主導で創立された朝鮮史研究会も当初は歴史学研究会の東洋史部会として構成されたことを考えると、[33]旗田の戦後朝鮮史学は基本的に歴史学研究会の批判的歴史意識のなかで培養されたといえる。

ところで旗田の『朝鮮史』が刊行されたまさにその年、偶然にも歴史学研究会が主催した学術大会の主題もまた「民族」問題であった。[34]「歴史における民族問題」という全体テーマのもと、古・中世部門では藤間生大と古島和雄がそれぞれ「古代の民族問題」と「中世の民族問題」を、近代部門では鈴木正四、遠山茂樹、野沢豊が「近代史における民族問題」、「日本のナショナリズム」、「中国の民族解放運動」を順に発表した。一九九二年に歴史学研究会創立六〇周年を記念する座談会席上で、永原慶二は一九五一年の大会を次のように回顧した。すなわちそれは「戦後の国民的課題を本格的に受け入れるもの」であり、一国完結的な歴史認識に基づいて世界史の基本法則を論じていた以前の大会と異なり、「民族問題は（現実の提起する問題を、引用者）まっ正面からそれに応えようという姿勢が非常に強くあった」というのである。[35]

しかし国家主義の記憶により「民族」や「愛国」のような言葉を用いにくかった当時の状況を考慮すると、「民族」問題の公論化を、単純に国民的課題を受け入れた研究の深化だけでは説明できないであろう。中野敏男が指摘したように、敗戦直後のナショナリズムの衰退が民族主義の消滅を保証はしなかった。民族主義は公論の舞台の後ろにしばらく追われていただけであり、このような民族主義の潜在化傾向のなかで戦前の加害責任と直接対面することも合わせて回避された。そうしたなか、冷戦を背景にした占領政策の「逆コース」により、一九五一年ごろから屈辱と被害意識が充満した「民族」問題が覚醒するに至り、結果的に戦前の加害責任は放棄されたま

ま「民族」の復帰だけが成し遂げられたのであった。[36]

磯前順一は日本の「戦後歴史学」を代表する歴史学者である石母田正を通じて、この時期の「民族」問題にもう一歩入っていった。彼によると、一九五〇年代はじめに石母田の著作で民族とは基本的に時代によって変化しながらも一貫した連続性をもつ伝統体として定義され、帝国主義に対峙するなかでは簡単に均質な一つのかたまりとして設定された。そうだとはいえ、石母田の民族観は戦前の皇国史観のように侵略性をもったものではなかった。石母田はどこまでも「民族」を単位とした個別的な歴史の上に、国内の民主主義と国際平和を構想しようとしたのである。しかし一九五三年以後には自身の民族観を反省しつつ、民族内部に階級問題を引き入れようとしたが、それでも依然として多民族帝国主義＝悪／単一民族主義＝善という図式の上で日本民族の均一性を無批判に肯定し、それによって日本が惹起していた他民族との摩擦も思考の奥底に追われていったと説明した。[37]

そうすると朝鮮史の叙述における「朝鮮民族」本位を主張した旗田はこの時期、「民族の発見」をどのように受け入れていたのであろうか。旗田は前述した学術大会の発表者のうちの一人である藤間生大の論文「東アジアの政治的社会の成立」（『歴史学研究』一五〇、一九五一年三月）についての書評を一九五一年九月に刊行された『歴史学研究』一五三号に掲載した。この文の題目が「古代の民族問題」であった事実からも分かるように、書評の中心は「民族」であった。

旗田の整理にしたがえば、藤間の論文は中国の影響の下に東方の諸民族が成長したという既存の見解を「民族」の観点から再検討したものであり、結論的には強力な支配権力を同伴した中国文明の流入がむしろ東方諸社会の成長を妨害しただけであると主張した。旗田はこの論文の研究史的意義を認めながらも、次の数点については異議を唱えた。

まず指摘したのは「民族」を言いながらも、それが出現することになった社会的条件については全く言及しなかったという点である。旗田は「「民族」が生れるためには一定の社会的条件が必要である」[38]と述べたが、ここで「一定の社会的条件」とは古代統一国家の誕生、言い直すと奴隷制の成立および発展を示す。「社会的条件」の前に「一定の」という修飾語が付いたのは、「社会的条件」にさまざまな段階が設定されるためであった。旗田は「社会的条件」が新たな段階に進入すれば、「民族」もまたその制約のなかで新たな性格を付与されることになるとし、したがって古代「民族」と現代「民族」の間の隔絶を繰り返し強調した。そして研究者がこのような違いに敏感でない場合、「古代の『民族運動』が古代のものではなく、まるで現在のことのようになり、古代史の進歩に役立たぬばかりか、現在を古代に還元させるおそれまである」と警告した[39]。

ところで上のような指摘に先立って旗田は早くから民族の起源とその特殊性、民族の興亡などを中心課題にしていた戦前の古代史研究が招来した結果を想起していた。あえて言えば戦前の轍を踏まないために過去の実体究明可能性と研究の現在的意義を問い直したわけであり、もしそのうちの一つでも研究者が答えられないというなら、「民族」を提起すること自体が誤りであり、「民族」を取り扱う方法に問題があるのだと断言した[40]。そうしてみると旗田の次のような批判は藤間一人ではなく、戦後日本歴史学界を対象にしたものとみても良いであろう。

古代の「民族」は、現在民族問題が大切だから古代の民族問題を考えるという便宜主義からではなく（それはかつての民族主義の常套的手段でもあった）、古代史の具体的認識のなかから生れなくてはならない。それによってのみ、現在の民族問題の意味も明白になると思う。この点について、藤間氏は納得できる説明をしていない。そのために、「民族」の内容がぼやかされ、また「民族」を考えることが古代史の前進にどれだけ

役だったかもはっきりしなくなり、ただ現在の民族的感情だけがあふれているという印象を与える。藤間氏の論文の中には、敬服すべき点が少くないにもかかわらず、なぜそれを「民族」的角度で言わねばならないのか、「民族」などいわずにすむのではないか、などという疑問がつきまとう。熱情・感慨が先に走りすぎたことが、こういう結果になったのであろう。[41]

また他の批判は「民族」の内部に向かった。藤間は外侵に対抗した新羅を「全民族」の強固な結合体とみたが、旗田は新羅の骨品制を挙げて藤間の議論が事実に反するものであると批判した。旗田によると、新羅の「民族」内部は貴族と民衆に分かれていた。貴族層内では古くから族的共同関係が残っていたが、大多数の民衆は貴族層にだけ占有されるそのような関係の外で奴隷のような状態に置かれていた。そのため藤間の主張のように三国統一のための新羅全民族の努力であったり、そのための金庾信の献身などはありえないと指摘した。旗田はこのような誤謬の原因をふたたび「民族」出現の社会的条件が見過ごされた点に求めた。すなわち「古代に「民族」があるとすれば、それはあくまでも古代のものであり、奴隷制の上に立つものである。これを無視した「民族」は現実に存在しない」と主張した。[42]

たとえば旗田において「民族」とは一定の社会的条件の上に出現し、外圧に対抗する過程で社会的発展がなされる存在であったといえる。そのとき抵抗は、民族であるといっても支配層ではなく民衆の役割であり、そのために抵抗の伝統は民衆によって継承されるのであった。旗田の「民族」は民族内階級対立を認めているという点で石母田の一九五三年以後の「民族」概念を先取りしたものと見られる。しかし旗田は戦前の経験に照らして戦後空間での「民族」の復帰もまた警戒したことで「戦後歴史学」との緊張関係も見逃さなかった。

それにも関わらず、磯前順一が石母田正に行った批判、すなわち「石母田の議論は、近代を超えて歴史を貫く連続性を暗黙の前提としたものになっており、民族という主体そのものを歴史の流れのなかで対象化できなかった」[43]という指摘は旗田にもそのまま適用できる。たとえ旗田の「民族」が社会的条件に制約を受けて階級対立を内包する単位であったといっても、「民族」自体はその性格を変えていきつつも、歴史のなかで綿々と連なる超歴史的存在と見なさねばならないからである。この点で旗田の議論がもつ限界も明らかであるといえる。

ところが同時に旗田の「民族」は石母田のそれとは異なり、自身と同一視される「日本民族」ではなく、他者としての「朝鮮民族」であったという点も見過ごしてはならないであろう。「朝鮮民族」を主体にした旗田の戦後朝鮮史学は「民族」自体ではなくとも、「日本民族」に対する相対化とそれに基づく両者間の関係設定が可能であった。後述するようにそれが自身の反省目録に「民族」の超歴史性問題ではなく「朝鮮民族」という他者の対面可能性を挙げたという事実も、彼が「民族」を通して実践しようとしたものが何であったかを傍証する。ただ彼の反省はその可能性を拡大させる方向ではなく、むしろ縮小させる方向に向かった。それは反省を促した事件の特性と関連する問題であり、それについては以下にもう少し見てみよう。

旗田の反省は『朝鮮研究』八〇号（一九六八年一〇月刊行）の座談会の文章で旗田の差別発言が含まれたまま刊行されたことからはじまる。[44] 旗田の差別発言とは、日本内での朝鮮史研究の孤立状況を説明するのに、それを差別語である「特殊部落」に例えたことをいう。座談会では旗田をはじめ安藤彦太郎、幼方直吉、渡部学、梶村秀樹、宮田節子などが参加したが、座談会の席上ではもちろん雑誌の発行過程でも旗田の発言を問題視する人はいなかった。しかし雑誌が刊行されたのち、読者から抗議と批判が相次ぎ、『朝鮮研究』側の微温的対処も加わって事態の収拾がつかなくなった。[45]

結局旗田は『朝鮮研究』八七号（一九六九年七月刊行）に「差別発言問題と私の反省」という文を載せた[46]。この文で彼は差別語使用について反省からはじめねばならなかった。日本国内の被差別部落が不当な差別を受けているという事実を知ってはいたが、それに対する認識不足により差別語を使用し、はなはだしくはそれを差別語と認知できなかったというのである。また自分なりにそれまで朝鮮および朝鮮人に対する日本人の偏見を批判してきたと考えていたが、今やそれについても大きな不安を感じるようになったと述べた。言い直すと「同胞に対する差別意識も洗い流すことができなければ、そもそも朝鮮、朝鮮人に対する偏見を批判することも可能なのだろうか」という自問である。

続いて反省は共感の問題につながった。それは差別と闘う当事者ほどの意識を望むことはできなくても、彼らの苦痛を理解することは難しいのであると述べた。このような断定を通じて今彼に可能なこととは、差別を受ける彼らを理解するために「努力」するしかなかった。ここに彼は再び朝鮮人のことを挙げた。同様に「朝鮮人の苦痛は日本人の私には簡単にわからないこと」と述べつつ、「理解できたような気分になることは厳に警戒せねばならない」と問い直した。

以上のような反省は結局『朝鮮史』序文で旗田自身が提起した二つの可能性について懐疑を呼び起こす。第一には国境の外の他者に対する認識可能性である。前述したように、戦後日本は植民地支配に対する忘却の上に成立していた。そこで「朝鮮の人間が歩いてきた朝鮮人の歴史を研究せねばならない」という旗田の問題提起は日本社会の忘却に対する抵抗的意味を内包していた。しかし以上のように日本の同胞に対する理解なくては朝鮮人も理解することができないという反省は結局「日本民族」という自己帰属の確認であり、それへの回帰であったということができる。

第二は他者との共感可能性である。何度も述べたように旗田は「朝鮮人の苦悩を自身の苦悩とみなすことが朝鮮史研究の起点」であると強調した。しかし以上のような反省を通じ、自身の非当事者性を再確認しつつ、そのような共感可能性は原則的に否定してしまった。これははじめから共感不可を叫び、それよりは侵略国人民としての日本人の位置とそれに対する自覚を強調していた山辺健太郎の批判を想起させる。[47]

結局旗田は自身の不察の原因を「若いときからアカデミズムの中で育ち朝鮮史を学んだ」という過去の経歴に求めようとしたようにみえる。抗議の訪問をした彼らに旗田が直接聞いた話の中には「研究や調査をする者は聞いたことを自身の業績とすることしか考えず、苦しむ人間を解放するために力を使わない」という批判も含まれていた。しかし以上の現実と壁を築くアカデミズムの批判こそ『朝鮮史』以後継続してきた旗田の主要テーマの一つであった。そうすると彼はそれを克服しようとしたが、最後まで克服することのできない課題であったと評さねばならないのだろうか。次章ではアカデミズムの問題についての旗田の思考過程を見てみる。

三　学問としての「戦後朝鮮史学」：純粋学問の克服のために

旗田の戦前朝鮮史学との断絶宣言は現在性を帯びた問題提起でもあった。『朝鮮史』と同様に一九五一年に刊行された『朝鮮学報』創刊号には京城帝国大学で教鞭をとった四方博の「旧来の朝鮮社会の歴史的性格について」という論文が収録された。この文には「この時代（朝鮮時代：引用者）の社会事象を大観する概ねの観察者の結論は、「停滞性」の一語に尽きる」とし、従来の停滞性論を拡大再生産していた。[48] さらに四方と同様に京城帝国大学の教授であった藤田亮策は、一九五三年に刊行した『朝鮮の歴史』において「一九一〇年の日韓併合によって、

近代文化に一日の長のある日本は、眠っている半島にその恩恵を分かち」といい、また寺内総督についても「武断的なものがありましたが、断固としてやりとげたいくつかは、今日もなおその恩恵に浴するものが多いのです」と評価した。[49] それだけでなく、戦後最初（一九五〇年一〇月）の韓国学関連学会として『朝鮮学報』の刊行主体でもあった朝鮮学会の雰囲気はまるで京城帝国大学の同窓会のような印象を与えたという。[50] 末廣昭は戦後日本のアジア研究の特徴として人的・制度的側面の連続性が知的資源の継承を担保はできなかったという点を挙げるが、[51] 少なくとも敗戦直後の日本の朝鮮史学界は戦前の知的資源をそのまま継承しており、その点において戦後空間で一つの島を築くと同時に戦後社会の裏面を暴露する存在であったといえる。

旗田はこのような背景から一九六四年に発表した「『満鮮史』の虚像―日本東洋史学の朝鮮観」を通して『朝鮮史』序文で提起した問題を実証的に検討する段階に進むことになった。旗田はまず「満鮮史」という用語がまるで自明な言葉であるかのように早くから広く使用されてきた事実に注目した。そしてその現象を解明するために明治末期まで遡って満鮮史の起源を探究し、結局は学問（＝満鮮史）と権力（＝満韓経営）の間の癒着関係を明らかにしたのち、次のように批判した。

> 満鮮史なるものは、満韓経営に対応して歴史家がつくりだしたものであり、その基礎には朝鮮人・朝鮮民族の発展や解放運動への無関心あるいは軽視があった。大陸政策という現実には敏感に反応し、その政治勢力と握手しながら、自己の研究対象そのものの動きには目をそむけるような歴史家の姿勢が、満鮮史をうみだしたといってよい。[52]

ところでこの文では早くから『朝鮮史』序文では見られなかった新たな問題もともに提起された。それは学問の純粋性についての問いである。

かつての朝鮮史研究の欠陥は、単に研究者が誤った政治目的に盲従・迎合し、場あたりの朝鮮史像をつくった、というだけのものではない。こういう非学問的なことも相当にあった。それは当然に否定されねばならない。しかし、こういうものは目につきやすいので批判も困難ではない。問題なのは、純粋に学問の研究を目ざすと考えていた人々の研究の内面まで入りこんだゆがみである。それは個々の問題に関する学説のちがいを乗りこえて、かっての日本人の朝鮮に対する姿勢のゆがみがもたらしたところの研究者の共通のゆがみである。それは研究者自身に意識されていないだけに、根深く抜きがたいものである。朝鮮史研究を正しい軌道に乗せるためには、これを研究者が自ら克服せねばならない。[53]

すなわち権力と距離を置いて純粋な学問だけを探求してきたという人にも朝鮮への姿勢においては隠れた枠組みを発見できるというのである。旗田は満鮮史をそのような代表的事例として挙げたのであるが、それは何よりも満鮮史という用語が東洋史および朝鮮史研究者のあいだで何の疑いもなく広く通用した事実によって証明されるとした。

旗田が学問の純粋性の問題に注目することになったのは、彼自身も参加した、南満洲鉄道株式会社[54]による「中国農村慣行調査」の成果を戦後日本で出版する過程であった（事業成果は一九五二年から五八年まで『中国農村慣行調査』という題目で全六巻が出版された[55]）。上記の調査の実施経緯と方法を概略的に説明すれば次のようにな

る。満鉄による農村調査は一九一〇年代の「満洲習慣調査」まで遡ることができるが、村落レベルの総合的な実態調査は一九三九年末に満鉄北支経済調査所と、企画院傘下の東亜研究所が共同で実施した「中国農村慣行調査」が最初である。事業計画は一九三九年一〇月に東亜研究所第六調査委員会内学術部委員会で「華中商事慣行調査計画」とともに「華北農村慣行調査計画」という名前で樹立され、これと呼応する形態で満鉄調査部が北支経済調査所に慣行調査班を組織した。[56] 学術部委員会側の指導者格に該当する末弘厳太郎は調査目的を「中国社会に行わるる法的慣行の調査」と規定したのち、「同じく法的慣行の調査と言つても嘗て台湾に於て行われた旧慣調査に於けるが如く立法乃至行政の参考資料を得ることが目的でないことは明かである。（中略）中国の民衆が如何なる慣行の下で社会生活を営んでいるか、換言すれば、中国社会に行われている慣行を明かにするによって、其社会の特質を生けるがままに書き出すことこそ吾々の調査の目的」であると明らかにした。[57] そしてそれに合わせて調査の方法も「既成の法的概念に拘わるることなく、現実を現実としてそのまま写し出すこと」が重要であると強調し、[58] 実地調査は調査員一名が助手一名を同伴して農民と直接質疑応答する形態で行われた。[59]

このように「中国農村慣行調査」は原則的には占領地域の支配や統治のための手段的目的ではなく、社会現実の記録という純粋な学問的目的を標榜した事業であった。事業成果についての評価は肯定と批判の二つに明確に分かれた。朝日新聞社からは一九五二年度朝日文化賞を受賞し、文部省と政治経済研究所からは出版のための奨励金も受けた。[60] しかし批判の強さも並々ならなかった。論点は大きく二つであった。第一は事業の成果が質疑応答のような、加工されないデータでの提供に止まっているという点で、第二は調査自体が軍事占領地域で行われたという点である。[61] 特に後者と関連しては古島敏雄によって次のような批判が提起された。すなわち「純学問的調査をしているのだという意識が、かえって占領者の一員の調査であるという点についての反省を少くしている

のではないか」という指摘である。続いて彼はこのような反省の不足こそ実際には調査を駄目にしている原因であると批判した[62]。

最初に旗田は「戦時下で日本人が行った大きな成果中の一つ」であると自評していた[63]。一九五八年に発表された「「中国農村慣行調査」の慣行を終って」という文でも「純学術的調査という自負心は調査員の研究意欲をさかんにした」と述べた。古島の批判については一部受け入れたが、それにも関わらず「当時われわれが純学問的調査でありたいと考え、そのために努力し、それによって調査意欲を高めたこと自体が誤りであったとは思わない」と一線を引いた[64]。しかし彼の回顧で告白しているように[65]、古島の批判は彼に純粋学問というものが存在可能なのかという質問を投げつけ、前述した論文の「満鮮史の虚像」はまさにそれに対する答えを求めようとしていたのだといえる。ところで「満鮮史の虚像」は学問の純粋性よりは学問と権力の間の癒着関係に大部分の紙面を割いている。さらに旗田が満鮮史の代表的事例として挙げた稲葉岩吉は、史論を通じて現実問題に積極介入していこうとした人物なわけであり、はじめから彼を素材に学問の純粋性を論じるのにはふさわしくなかった[66]。

この問題をより本格的に扱ったのは一九六六年に発表した「日本の東洋史学の伝統」であった。この論文の問題意識は一九六四年と一九六五年に『歴史評論』に連載された旗田の回顧談のなかでまず確認できる。そこで旗田は過去と変化した研究環境に感嘆と期待を表し、A・F問題、すなわちアメリカのアジア財団とフォード財団による研究支援問題を東洋史学の危機を示す象徴的な事件であると言及した。それを取り巻く学会の論争はすでに相当以上展開した状況であったが、旗田は判断に先立って、「学問と政治の関連性については東洋史の伝統的思考方式」を考えることになった。旗田が述べる「東洋史の伝統的思考方式」とは、現実と距離を置くこと、そのような断絶を学問成立の条件とまでみなす研究者の態度について述べることであり[67]、それは学問と権力の癒着関

係を暴露するのに注力したそれまでの研究からもう一歩進んで、研究者の社会的責任を問うことという点で注目するに値する。

このような問題意識を具体化し、「日本における東洋史学の伝統」ではA・F問題が果たして新しい事態なのかという質問からはじまる。そして次のように答えた。

私はそうは思わない。形はちがうが本質的には多分に共通性のある事態を何度も経験している。あまりにも経験しすぎて、気にかからない程に経験している。まずそのことを知るべきである。同時に、そういう経験にさいして、それに何の不安も感じないで当り前のことと見すごしてきた日本の学界の伝統、現在においても、これについて反省・批判の乏しい学界の伝統が問題である。私自身もこういう学界で育ってきたものの一人として、今回の問題を考えるに当っては、わが学界の伝統を思いおこさざるをえない。[68]

このように学問と権力の癒着関係を当然視してきた学界の伝統の基底には「どういう力と結びついても、研究者自身の努力によって、研究の純粋性を守りうる」[69]という確信があったと旗田は指摘する。日本の東洋史学は主に古代の地名および年代考証に没頭してきたため、それが可能になったともいえる。しかし旗田はそのような研究ですら現代を生きていく研究者の思想を媒介にして現実と連結するとみた。そのため研究者が本当に学問の純粋性を守ろうとするのなら自身の思想自体を消さねばならないという不可能性に挑戦せねばならなかったが、旗田はそれを実際に試みた人物として、中国経済史の開拓者として評価される加藤繁を挙げもした。[70]

結果的に思想の消去は研究者をして個々の事実究明にだけ力を使うようになり、それによって未来を総合的に

予見できる力を欠落させられた。このように歴史の体系的認識を放棄した研究者は学問の純粋性を代価に、権力と無責任に結合していった。これに旗田は次のような質問を投げかけた。「現実をはなれ思想をすてることが学問の純粋性・主体性を守り、学問の内容を高める道であるのか、逆に現実に目を注ぎ思想と学問とを統一することが、より正しい方向であるのか」[71]。旗田は後者を選択した。それを通じてこそ、一九六〇年代当時変革と解放の渦にあった戦後アジアの現実と直接対面することができると考えたためである。

四　終わりに：「戦後朝鮮史学」の限界と可能性

以上でみたように、一九五一年に刊行した旗田巍の『朝鮮史』は戦前の朝鮮史学を人間不在の歴史と批判し、朝鮮人の苦悩を自身の苦悩とみなして朝鮮人を主体とした新しい歴史、すなわち戦後朝鮮史学の方向を提示した。これは単純に植民史学の伝統を批判するためであったというよりは、過去および外部との二重の断絶の上に成立していた、戦後日本という空間にその過去であり外部でもあった朝鮮を再配置することで、日本の戦後空間に亀裂を惹起しようとした一つの実験であり挑戦であったと考えられる。

旗田は戦後日本社会が他者（すなわち朝鮮）との対面を回避する根本原因を、日本人の歪曲された朝鮮観に探し出し、それの解体のためにそのような認識が形成された起源まで遡った。それを通じて旗田は学問と権力の間の癒着関係を暴露することができ、さらに権力と分離した純粋学問の存在可能性を懐疑的に見るようになった。純粋学問に対する盲信は研究者をして現実と距離を置くようにさせたが、研究者が学問から思想を消去してしまうというように逆説的にも学問と権力の間に無責任な結合を招来してしまったというのが旗田の分析である。旗

田はそれを防止することのできる一つの代案として、学問と思想の統一を提示した。それこそが学問に閉じこもった研究者が再び現実と対面することのできる通路であり、総体的な未来を展望することのできる出発点であると考えたためである。

しかし旗田が歴史の主体と立てた「（朝鮮）民族」はその超歴史的性格により戦前の皇国史観に根ざす「（日本）民族」や戦後の加害責任を消し去った「（日本）民族」とも混同されやすく、朝鮮人との共感可能性は当事者ではないという理由で、また自分自身の加害者の一員でもあったという理由で継続して疑われた。そしてアカデミズムの強固な壁は朝鮮史学史で朝鮮人不在の状況を招来することともなった。[72] ひょっとしたら単純に差別発言という一つの事件でなく、このような諸制限が彼を総体的な反省へ引っ張っていったのかもしれない。

それにも関わらず、最近の実証主義とポストコロニアリズムの共謀のなかで提起される旗田批判は再考の必要性を感じる。実証主義はいつでも実証の不足を問題とし、旗田の立論を解体しようとしてきたが、満鮮史再論の現在的文脈に無関心な実証主義こそ、戦前の学問的伝統を継承しているのではないであろうか。またそれと強固に結合している脱近代的議論はすでに流行が過ぎ去った超歴史的存在としての「民族」を消去しているのにとどまらず、「民族」が込められていた抵抗の歴史自体、そして社会と向き合おうとする歴史家の現実意識まで消し去っているのではないだろうか。

最近の韓国では植民史学を批判しながらも、一方ではそれを鏡として成立した近代韓国史学の性格を暴露しながら「植民主義歴史学」という命名を通じて近代歴史学に対するメタ批判の可能性を探そうとする努力が試されている。[73] 歴史認識のパラダイム転換が要求されているいま、我々は旗田をどのように読まねばならないのであろうか。

旗田は次のように述べた。「私自身は前にいったように、侵略的研究体制のなかで育ってきた。今にして思うと、そのことが私の研究内容に大きな歪みを残したのは争えない事実である。それをくり返したくはない」[74]と。旗田の戦後朝鮮史学の可能性は事後的に評価される限界からではなく、旗田自らが克服しようとしたが克服できない臨界の地点から、言い換えれば上のような「反復」の事実を断ち切れるよう地点から探究しなければならないと考える。そしてそれは歴史家の身体性を受け入れて自らを対象化する過程でのみ可能になるのである。[75]

註

（1）旗田は朝鮮慶尚南道の馬山小学校と釜山中学校を経て九州熊本の第五高等学校を卒業した後、一九二八年に東京帝国大学文学部東洋史学科に入学した。大学卒業の翌年の一九三二年には東洋史研究室で副手となったが、翌年からは満蒙文化研究所研究員も兼ねた。一九三九年には東方文化研究院東京研究所研究員、一九四〇年からは南満洲鉄道株式会社北支開発会社調査員となり、中国の農村実態調査に参加した。一九四四年に北支開発会社調査局に異動し、敗戦後の一九四六年には中華民国政府に留用されて国際問題研究所研究員として服務した。一九四八年日本に戻った彼は一九五〇年に東京都立大学人文学部教授となった。以上の旗田の履歴は旗田巍先生追悼集刊行会『追悼　旗田巍先生』Pワード、一九九五年の年譜を参考。

（2）旗田巍「朝鮮史学を貫いたもの」『アジア』一九七六年八・九月号合併号、一九七六年、二六〇頁。

（3）旗田巍「朝鮮史を学ぶために」『朝鮮と日本人』勁草書房、一九七三年、二頁。

（4）旗田巍『朝鮮史』岩波書店、一九五一年、五頁。

（5）韓国で刊行された高吉嬉の『하타다 다카시（旗田巍）』（知識産業社、二〇〇五年）は二〇〇一年に提出した博士論文「旗田巍における『植民意識克服』と『アイデンティティ統合』―植民地朝鮮と戦後日本を生きた一知識人の思想形成に関する研究」を修正したものである。日本では本書に先立って二〇〇一年一一月に『『在朝日本人二世』のアイデンティティ形成―旗田巍と朝鮮・日本』というタイトルで桐書房よ

り刊行された。

(6) 高吉嬉『하타다 타카시』知識産業社、二〇〇五年、一八頁。

(7) 前掲書、二八二頁。

(8) 竹内好は敗戦直後のナショナリズムとの対決を忌避する心理には戦争責任に対する自覚不足があると指摘し、それを「良心不足」であると指した（中野敏男、성공회대학교 동아시아연구소 企画 권혁태 차승기 訳「전후 일본에 저항하는 전후사상」『전후의 탄생』그린비、二〇一三年、三三頁）

(9) 瀧澤規起「이나바이와키치와 만선사」『한일관계사연구』一九、二〇〇三年、一一四頁。

(10) 前掲論文、一一二五―一一二六頁。

(11) 前掲論文、一一二五頁。

(12) 櫻澤亞伊「『満鮮史観』の再検討―「満鮮歴史地理調査部」と稲葉岩吉を中心に」『現代社会文化研究』三七、二〇〇七年、一二六頁。

(13) 櫻澤亞伊「이나바이와키치의 만선불가분론」『일제시기 만주사 조선사인식』동북아역사재단、二〇〇九年、一六頁。

(14) 旗田巍「『満鮮史』の虚像」『日本人の朝鮮観』勁草書房、一九六九年。この文章は『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』（鈴木俊教授還暦記念会、一九六四年）に収録されたものを再収録したものである。

(15) 毛利英介「満洲史と東北史のあいだ―稲葉岩吉と金毓黻の交流より」『関西大学東西学術研究所紀要』四八、二〇一五年、三四四頁。

(16) 井上直樹『帝国日本と「満鮮史」―大陸政策と朝鮮・満洲認識』塙書房、二〇一三年、四七頁。

(17) 前掲書、二三〇頁。

(18) 三好洋子「旗田先生の思い出」『追悼旗田巍先生』（旗田巍先生追悼集刊行会編）Pワード、一九九五年、一〇八―一〇九頁。

(19) 旗田巍「朝鮮史研究をかえりみて」『朝鮮史研究会論文集』一五、一九七八年、一四八―一四九頁。

(20) 末松保和・周藤吉之・山辺健太郎「旗田巍書『朝鮮史』」『歴史学研究』一五六、一九五二年、四一頁。

(21) 千寛宇「旗田巍書『朝鮮史』」『歴史学報』一、一九五二年、一二八頁。

(22) 李進熙「旗田巍先生の死を悼む」『追悼旗田巍先生』（旗田巍先生追悼集刊行会編）Pワード、一九九五年、一五八頁。

(23) 안종철「주일대사 에드윈 라이샤워의 근대화론」과 한국사 인식」『역사문제연구』二九、

二〇一三年、三二一五頁。

(24) この本は李基東（イギドン）の翻訳で一九八三年に韓国でも出版されている。

(25) 旗田巍『日本人の朝鮮観』勁草書房、一九六九年、二九六―二九七頁。

(26) 千寛宇、前掲論文、一二七頁。

(27) 旗田巍『朝鮮史』岩波書店、一九五一年、三―五頁。

(28) 前掲書、二五一―二五二頁。

(29) 旗田巍「東洋史学の回想（二）」『歴史評論』一七三、一九六五年、一二―一三頁。

(30) 前掲論文、一四五頁。

(31) 前掲論文、一四七―一四八頁。

(32) 矢澤康祐「旗田巍先生の逝去を悼む」『追悼旗田巍先生』（旗田巍先生追悼集刊行会編）Pワード、一九九五年、九四頁。

(33) 前掲論文、九五頁、「ルポ・朝鮮史研究会」『鶏林』一九五九年三号、三六頁。

(34) 歴史学研究会編『歴史における民族の問題―一九五一年度歴史学研究会大会報告』、岩波書店、一九五一年を参考。

(35) 歴史学研究会編『戦後歴史学と歴研のあゆみ』青木書店、一九九三年、六三頁。

(36) 中野敏男、前掲論文、二〇一三年、三二―三五頁。

(37) 磯前順一「石母田正と敗北の思考―一九五〇年代における転回をめぐって」『戦後知の可能性―歴史・宗教・民衆』山川出版社、二〇一〇年、三九―四六頁。

(38) 旗田巍「古代における民族の問題」『歴史学研究』一五三、一九五一年、四四頁。

(39) 前掲論文、四三―四四頁。

(40) 前掲論文、四四頁。

(41) 前掲論文、四五―四六頁。

(42) 前掲論文、四五頁。

(43) 磯前順一、前掲論文、二〇一〇年、四八頁。

(44) 『朝鮮研究』（本来は『朝鮮研究月報』であったのを三〇号から改称）を発行した日本朝鮮研究所は一九六一年一一月一一日に設立された。問題となった座談会は一九六二年から六四年まで全一〇回にわたって開催され、のちに研究所の最大の業績と評価される連続シンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積をいかに継承するか」を総括する席であった。この座談会を含めた連続シンポジウムの内容は「シンポジウム　日本と朝鮮」という題目でまとめられ一九六九年一月に勁草書房から刊行され

た。その時旗田の差別発言部分は「部落」を削除する形態で修正がなされた。

(45) 旗田の差別発言問題の経緯は「本誌差別発言問題の経過と私たちの反省」(『朝鮮研究』八七、一九六九年)に詳しい。

(46) 旗田のほかに同席した宮田節子、梶村秀樹の反省文もそれぞれ『朝鮮研究』八七号と八九号に載った。

(47) 末松保和・周藤吉之・山辺健太郎、前掲論文、四一頁。しかし旗田は朝鮮人との共感可能性を以後にも継続しており、完全に否定し続けたのではない。一九七九年一月一二日に専修大学で開かれた最終講義で彼は次のように述べた通り。「『朝鮮人の苦悩を自分の苦悩とする』という点については、手きびしい批判を受けました。日本人に朝鮮人の苦悩がわかるはずはない、そんなことを考えるのは大間違いだ、日本人研究者は日本の朝鮮侵略史の暴露に全力をあげるべきだ、という批判です。たしかに日本人が朝鮮人の苦悩をわかるのは困難です。その点を安易にいってのけたのは軽率でした。しかし私の考えがまるっきり誤りだったとは思いません。日本人にも朝鮮人の苦悩に共感できるものがあるはずだし、共感の努力はすべきだと思います。同じ立場に身をおくことはできないけれども、相手を認識して理解し、相手に共感することはできると思います。そういうことが戦前の朝鮮史研究ではあまりにも乏しかったように思います」(旗田巍「新しい朝鮮史像をもとめて」『新しい朝鮮史像をもとめて』大和書房、一九九二年、一三二頁)。このように旗田は一方では『朝鮮史』の問題提起が軽率であったと認めながらも、もう一方では他者との共感可能性を最後まで失わないようとした。違う言い方をすれば、彼は退任するときまで自身の「反省」と対決していたわけであり、最後まで決しない勝敗によってそれから抜け出すことができなかった。

(48) 寺内威太郎「『満鮮史』研究と稲葉岩吉」『植民地主義と歴史学―そのまなざしが残したもの』刀水書房、二〇〇四年、三八―三九頁から再引用。

(49) 旗田巍ほか「(座談会)朝鮮研究の現状と課題」『東洋文化』三六、一九六四年、九五頁から再引用。

(50) 前掲論文、九四頁。朝鮮学会の創立および活動に関連しては長森美信「戦後日本における朝鮮中近世史研究―一九七〇年代までの高麗・朝鮮時代史研究を中心に」『朝鮮史研究会論文集』四八、二〇一〇年参考。

(51) 末廣昭「アジア調査の系譜」『岩波講座「帝国」

日本の学知六　地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年、五九頁。

(52) 旗田巍「『満鮮史』の虚像―日本の東洋史家の朝鮮観」『日本人の朝鮮観』、勁草書房、一九六九年、一九〇頁。

(53) 前掲論文、一八〇―一八一頁。

(54) 南満洲鉄道株式会社は日露戦争の勝利により東清鉄道の寛成子（長春郊外に位置）以南の鉄道とその沿線附属地に関する権限を譲渡された日本が、一九〇六年一一月に創立した半官半民の株式会社である（小林英夫『満鉄調査部』講談社、二〇一五年、一七頁）。旗田が満鉄の調査事業に参加することになった経緯は次の通りである。満蒙文化研究事業の一環として東洋文庫で『朝鮮王朝実録』を抄録する仕事を担当していた旗田は東亜研究所の設立の話を聞き、指導教授の池内宏に離職の意思を明らかにした。しかし軍人や官僚による研究機関統制に大きな不満を抱いていた池内の強力な反対により、東亜研究所行きは断念せざるを得なくなった。その後歴史学研究会幹事であったときに面識のあったマルクス主義法学者の平野義太郎の提案により、満鉄調査部行きが決定したという（旗田巍前掲論文、一九六五年、一五―一七頁）。

(55) 旗田巍、前掲論文、一九六五年、一七頁。「満鉄調査部へ行くことを考えたときに、満鉄という侵略機関にはいることについての反省・ためらいは正直のところ皆無でした。東京の息苦しい空気から解放され、広い世界で中国農村の研究にとりくみ、新しい研究を展開するという期待でいっぱいでした。侵略機関の一員になるなどと考えたこともありませんでした。そういうことは意識にのぼらなかったわけです。向うにいってからもそうでした。戦後、帰国してからも当分は同様でした。それに気づいたのは、昭和二四年に大阪で教員適格審査をうけたときです。戦争中の活動をきかれて、満鉄調査部にいたと答えたところ、それが問題になって許可がなかなかおりなかったために、なるほどと思いました。しかし、このときは切実には考えないで、アメリカ軍の命令のためだろうぐらいに、簡単に片付けました。それが私自身の内面の問題になったのは、『中国農村慣行調査』第一巻が出版されて、のちに古島敏雄さんの批判をうけてからです」。

(56) 中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』第一巻、岩波書店、一九五二年、一頁。

(57) 前掲書、一七―一八頁。

(58) 前掲書、二一頁。

(59) 次は一九四二年五月一三日に河北省静海県上口子門で旗田が保長徐邦佳と行った面談内容の一部である（満鉄北支経済調査所『北支慣行調査資料之部』第七七冊概況編第一一号、一九四二年、一頁）

問：年はいくつか？　答：四三才。

問：いつから保長をしているか？　答：二九年一〇月頃から。

問：その以前は村長をしていたか？　答：したことなし。

問：あなたの前にも保長があったか？　答：なし。私が始めて保長になった。

問：現在村長ありや？　答：なし。

問：保長が出来る迄は村長があったか？　答：あった。

問：村長のことを別に何人と呼んだか？　答：村正、郷長。

問：副保長ありや？　答：あり。

(60) 旗田巍「『中国農村慣行調査』の刊行を終って」『図書』一〇九号、一九五八年、二六頁。

(61) 末廣昭、前掲論文、二〇〇六年、三六―三七頁。

(62) 旗田巍、前掲論文、一九五八年、二七頁から再引用。

(63) 旗田巍「中国農村慣行調査」『学術月報』七巻七号、一九五四年、二三頁。

(64) 旗田巍、前掲論文、一九五八、二七頁。しかし『中国農村慣行調査』第四巻の対象地域であった山東省歴城県冷水溝蔵を再訪し、満鉄調査資料の価値と信憑性を再検討した中生勝美は戦時という状況と日本軍占領地という調査地域の特性にも関わらず、調査員は日本軍に受けた被害に関連して質問しなかったと指摘した。そしてその理由を調査自体が中断してしまうかもしれないという調査員の自己規制のためであると説明したが（中生勝美「『中国農村慣行調査』の限界と有効性―山東省歴城県冷水溝蔵再調査を通じて」『アジア経済』二八（六）、一九八七年、三六頁）、これは調査結果の現実的活用を前提としなくても、また戦況の悪化という直接的な制約がないといっても、調査者がおかれた現実的条件によって学問的な純粋さが歪曲されうることを如実に示す。

(65) 註（55）参考。

(66) 旗田巍「『満鮮史』の虚像―日本の東洋史家の朝鮮観」『日本人の朝鮮観』、勁草書房、一九六九年、一九五頁。

(67) 旗田巍「東洋史学の回想（三）」『歴史評論』一七五、一九六五年、二八頁。

(68) 旗田巍「日本における東洋史学の伝統」幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊編『歴史像再構成の課題』、御茶の水書房、一九六六年、二〇六頁。

(69) 旗田巍、前掲論文、一九六六年、二一二頁。

(70) 旗田巍、前掲論文、一九六六年、二一三―二一四頁。

(71) 旗田巍、前掲論文、一九六六年、二一七頁。

(72) 三ツ井崇「전후 일본에서의 조선사학의 개시와 사학사상」『한국사연구』一五三、二〇一一年、三章。

(73) 漢陽大学校比較歴史文化研究所企画／尹海東・李成市編『식민주의 역사학과 제국―탈식민주의 역사학 연구를 위하여』책과 함께、二〇一六年の総論格に該当する尹海東の「植民主義歴史学研究試論」参考。

(74) 旗田巍、前掲論文、一九六六年、二三五頁。

(75) 磯前順一、前掲論文、二〇一〇年、六一頁。

※ソウル大学校人文学大学院『人文論叢』七四（四）、二〇一七年一一月に掲載された朴俊炯「하타다 다카시와 '전후 조선사학'의 가능성」（原文　韓国語）を大幅に加筆修正した原稿の翻訳である。